

釣れ釣れなるままに

2006年思い出の釣行記 PART. 8

立ち止まりの効用

鹿島釣狂

釣遊会第6回大会

☆開催日 平成18年11月12日

☆開催場所 浦河井寒台～様似港

☆入釣場所 幌島

☆潮 干潮 01:25 31cm

満潮 09:39 109cm

☆釣果 カジカ 457 mm 以下8

カンカイ 222 mm

重量 5800 g

☆成績 合計点数 1259 点

成績 重量優勝

累計点 14 点 (⑦欠①②③①)



土鍋の前で出番を待つ主役たち（本日の釣果 34cm～46cmのカジカ）

もったいない精神

10月6日に予定されていた第6回大会が大時化（波予報8m～10m）のために延期になった。この日は、爆弾低気圧のため釣り大会が軒並み中止されるほどの荒れ模様で、道釣連大会でも浦河港内に限った開催を余儀なくされた。私は、このような予報から様似港の中での釣りを覚悟しながらも、準備万端整えて、出発地である岩見沢に向かった。その途中、事務局長より急遽中止の電話が入ったので、その状況を確認するために会長宅に立ち寄り、先の説明を受けた。

溶かしてしまったエサの保存はどうしたらよいのだろう？ 溶かしたり凍らせたりでイカゴロが提灯状にならなければよいが……。切り分けたカツオも身が剥がれやすくなるだろう。兎にも角にも、一旦、冷蔵庫の狭い冷凍室に無理矢理押し込んだ。マキエまで保存する隙間はない。11月12日に予定されている次の大会までは1ヶ月余り。マキエにアミを混ぜ込んでしまっているの、1ヶ月後は使える状態にはないと思いながらも、「もったいない」精神で、空気が入らないようにとビニル袋でぐるぐる巻に包んで物置に放置した。

滋賀県の知事選挙では、新幹線の駅の建設を進めるかどうかという行政的な施策で「もったいない」を公約とした女性候補が勝った。すでに調査費も含めて膨大な資金を投入し

ているので、後戻りするにも勇気がいることである。たかだか釣りエサのことだが、私たち庶民にとっては、すぐに諦められるものではない。一ヶ月後、はたして使える代物かどうかとおそろおそろビニル袋を解いてみると、どれも一応使えそうだった。「もったいない」精神が功を奏したわけだ。



過去の足跡を追う

今回も、風が非常に強く、朝方は雨が雪に変わり、波は5mと予報している。やはり、様似港か浦河港での釣りを覚悟する。しかし、静内で海の状況を確認すると、降っていた雨も止み、波も2～3枚と平磯でも出来そうな気配なので、以前1度だけ入釣したことのある幌島の磯に決めた。幌島は沖に点々と岩が連なり、時化には比較的強いところだ。

堀内氏、佐々木氏と共に幌島バス停で降り、脇道を通って磯に向かう。堀内氏は手前から民家の間を通って海岸に出た。佐々木氏にどの舟揚場に入るのかを聞かれたので、〇番目と答える。佐々木氏は□番目に入るようだ。

線路を越えてから、佐々木氏がふと立ち止まり、「この付近も恐ろしいのだが」と呟く。何年も前に、澤田隆郎氏が「北海道のつり」に載せた紹介記事が思い出される。場所は定かではないが、確かこの辺りの「70メートルぐらい沖に良い根があり、その周囲が大物カジカ・アブラコの巣になっている」というものだ。

目指す舟揚場方向を望むとかなりの高波が押し寄せており、この付近の方が幾分穏やか

に見える。明け方の満潮時を想像すると、こちらの方が無難なところだ。ここで、荷を下ろすことにした。堀内氏が200m程右で準備している。佐々木氏のキャップライトは、何度も立ち止まっては海の様子を確認するように照らしていたが、最終的には目的の舟揚場で止まった。

感の牙え

しばらくアタリが出ない状態が続き、1時半、ようやく遠投の竿に小さなアタリが出た。ハゴトコかなと思いつつも初アタリに竿を持って備える。間もなくゴンゴンという本アタリにタイミングよく合わせる事が出来て、カジカの37cmが上がった。そこへ白泉に入った西川氏がペットボトルに入れた酒を片手にぶつぶつとぼやきながらやって来て、堀内氏のところへ向かったが、彼も芳しくないようだ。

間もなく、遠投の2本バリ仕掛けに竿を押しえ込むアタリが出る。竿を煽ると大物を予感させるに十分な重量感だ。波打ち際までの距離があったので、前を出ながら懸命にリールを巻く。しかし、それがいけなかったのだろう。引き寄せている途中で痛恨の根掛かり。何度煽っても抜けてくることはなかった。

同じ所に遠投する。糸ふけを取っている間にも先程と同じようなアタリが出て、これもタイミングよく合わせる事が出来た。そして同じように重い。先程のような失敗をしないように、しかも、仕掛けが切れないようにと細心の注意を払いながら懸命にリールを巻く。波打ち際に黒い塊が打ち上がった。慌てて駆け寄り、その塊を愛おしく抱えてバツカンに投げ入れた。尾鰭がぐにやりと曲がった。メジャーを当てると45cmはあるカジカだった。

余裕が出て来て、堀内氏の所へとお邪魔する。彼は、1投目にハゴトコがダブルで来ただけで、その後はアタリすらないということだ。私の釣果も聞かれたので40cmはあると応えたのだが「それじゃ。45cmはあるな」と返ってきた。

佐々木氏の所へも報告に行く。彼も獲物がない。チョコチョコとアタリが出るが、大きなエサを飲み込めないカンカイだろうと言う。嫁としてハゴトコぐらい釣れるだろうと思うが、来てくれないことには不安になる。イソメを持ってきているのでカンカイの嫁もあるぞと考える。

釣り場に戻ると、竿が薙ぎ倒されていた。時折、突風が吹いて、その度に竿立てを手で押さえるはめになる。エサを替えて打ち直したいところだがままならない。近投の竿にアタリが出たと感じたがそのまま放置して竿立てを押さえていると、左方向に大きく流された。道糸の方向が波打ち際まで流されたことを物語っている。それに、カジカ40cm、34cmがダブルで付いていた。オマケと言っては何だが、20cmほどのカンカイまでもが頭にハリが突き刺さって付いていた。釣ったというのではなく付いていた。はからずも小さいながら嫁が出来て、審査規定の2魚種5匹が揃った。付近の釣り人の釣果はほぼ全滅状態の中、この場に釣り座を構えたことは、佐々木氏の「立ち止まり」と「つぶやき」があ

ったにせよ、自分の感が冴えていたと思いたい。年々、移動するのが億劫になってきているので、この感が更に確かなものになっていくことを願いたい。

失敗を教訓にする

風は益々強くなってきた。2本に減らした竿を両手で押さえているとその1本がガクンと下がった。重い。根に掛けないように、しかも、ハリスが切れないようにと慎重にリールを巻く。どれくらい巻けたらだろうか、ゴツゴツとしたところで強く引くと、フッと軽くなった。反動で竿先がカツン、カツンと2本目まで引っ込んでしまった。道糸が切れていないことを望みながら糸を手繰ると、その糸だけがひらひらと舞い戻ってきた。しかも、その道糸は短い。すぐ手前なのだ。

以前、後悔したことがある。三石川河口で過去に例がないくらいの大物を、今回と同じようにキリキリと巻いていて、カケアガリで引っ掛かり切れたことがあったのだ。後で振り返ってみれば、あれはカケアガリではなく波打ち際でなかったかと思うことだ。暗くてよくわからなかったが、その時波打ち際を探していれば、そこに大カジカが横たわっていたのではないかと思えたのだ。

波打ち際にキャップライトを当てながら目を凝らす。何度も波が寄せては引き返す。いた！ 白と黒の斑の塊がライトに浮かび上がる。駆け寄ってみると、カジカの口には切れたハリスが2本。1本は上顎に刺さったハリのもので、もう1本は喉の奥でカツオのついたハリのものである。デブプリと太ったカジカ46cmである。ハリスに指を当てると何か所もささくれ立っている。

遠投にアタリが出て竿を煽るとガチッと根掛かり。しばらく様子を見てみるとアタリは頻繁に出る。10分後、再度挑戦するも根掛かりは外れてくれない。また、10分ほど放置する。時たま思い出したようにゴンゴンとしたアタリが続く。再々度、竿を煽る。外れた。これもズッシリと重く、カジカ45cmがあがった。2本バリのうちの1本のハリスが切れていた。根掛かりした方のハリスが切れたことによってそのカジカを回収できたのだろう。

足跡を追う

西の空が白みかけてきた。寒冷前線による雲と青空との境目が一直線になって近づいてくる。風は相変わらず激しく吹き、竿を三脚ごと薙ぎ倒そうと必死の形相である。とうとう、竿を1本だけにして、遠投でアタリを待つことにする。

私は、もう目標を失っている。嫁のカンカイは小さいが、ある程度の釣果を得て、この風の中では最高の釣りをしたと満足してしまっているのである。いつもならカンカイの嫁をアブラコに替えようと移動しながらの粘りを見せるのだが、その頑張りがきかない。やめてしまうと何もすることがないので、一応竿1本だけは出し、ただ漫然と打ち返している状態なのだ。年のせいだろうか。そうは思いたくない。この風が意欲を萎えさせるのだ。

そんな私に海が応えてくれるはずもない。アタリも全くなかった。風に負けないように竿を押さえている手が自堕落な足に代わった。

先日も竜巻被害が佐呂間町を襲い、多くの死傷者を出したばかりだ。竜巻被害もさることながら、私たち釣り人は絶えず厳しい自然と向き合っており、地震・津波・雷・高潮などの危険に晒されている。己の行動を自重しながらと考えるのはやはり年のせいだろうか。そう思うと納得がいく。

堀内氏が近くに移動してきた。この人の根気よさにはほんとうに感心してしまう。私よりかなり先輩にあたるのだが、いとも当然という感じで三本の竿を出した。最初に来たハゴトコダブルからほとんどアタリがないままなのだが、根気よく、打ち返しているのだ。イカゴロを付けコマセもたっぷり入った仕掛けを何度も振り込んでいる。そう考えると、私が暗い内に釣れたのは、堀内氏のコマセが効いたのだと思えてくる。堀内氏のマキエが引き潮の流れに乗って流れ着くところが丁度私の遠投場所に当たるのだ。今は潮の流れが変わったのでその恩恵はない。引き上げる時刻にはまだ相当間があるが、余裕を持って片付け始めた。



粘る堀内氏

バス待ちしていると、佐々木氏があがってきた。そして、私の足跡をつぶさに追って私の釣りをイメージできたというのだ。砂浜にくっきりと浮かび上がった痕跡が、次の大会の参考になったというのだ。釣り名人といわれている人たちは、仲間の足跡と審査結果から、その人の釣り場を推測し、この次入時の手がかりにするそうだ。また、仲間に解らないように自分の足跡を消したり、その捜査を攪乱するために、新たな足跡を残したりすることもあるという。足跡を追うのは刑事ばかりではなく、釣り人も同じなのだと感心する。

審査結果は、ダントツの重量優勝だった。そして、この強風のため皆釣果があがらず、43.6cmのカジカを釣った佐々木氏が身長優勝を果たした。次回も人に足跡を追われるような釣りをしたいものだ。

審査結果は、ダントツの重量優勝だった。そして、この強風のため皆釣果があがらず、43.6cmのカジカを釣った佐々木氏が身長優勝を果たした。次回も人に足跡を追われるような釣りをしたいものだ。

審査結果

優勝	鹿島釣狂	1259点	(カジカ 457mm+カンカイ222mm+5800g)	幌島
準優勝	佐々木秀美	852点	(カジカ 436mm+ハゴトコ230mm+1860g)	幌島
3位	谷口良幸	656点	(ハゴトコ276mm+カジカ 275mm+1050g)	鵜苦
4位	嵐 光博	633点	(アカハラ351mm+ハゴトコ216mm+ 660g)	様似
5位	山岸 伸	543点	(カジカ 295mm+カンカイ200mm+ 480g)	鵜苦
身長優勝	鹿島釣狂	45, 7cm	(カジカ)	幌島

【つれづれ】

団体戦優勝

阿部重義 堀内正博 鹿島釣狂 庄司幸吉

拾得物

バスを待っている時、トラックの荷台から昆布の入った袋が落ちた。袋の口が開き、強風に乗ってこちらに向かってカサコソと飛んでくる。車がスピードをあげながら頻りに通る中を、年配の婦人が拾い集めている。私の近くにも飛んでくるものだから、拾い集めて届けようと思っているところへバスが来た。拾った昆布をその場においてとも思ったが、この風ではまた、すぐに飛ばされてしまうだろう。結局、持ったままバスに乗り込んでしまった。これはカジカ汁の出汁になって活躍した。いつか違う形で恩返しを・・・。

称号

佐々木氏が「北の釣り会」で1発屋の称号を与えられているそうだ。人が考えられないような大釣りもするが、釣れないとなるとあきらめが早く、早々に眠りについてしまうというのだ。1週間後の「北の釣り会」の大会では私が足跡を残した場所に入ったが、釣果は皆無だったということだ。

参加者

前回の大嵐や竜巻被害に恐れをなしたか11名（臨時 佐々木、西川、阿部）と寂しい大会だ。

そそっかしい

1投目のゴロ天秤ネット仕掛けが飛んでいく。そして、道糸だけが舞い戻ってきた。道糸の先のチワワが残っているのをみると、仕掛けのサルカンに付いたスナップを止め忘れたのだろう。そそっかしい自分が顔を覗く。慌てない。慌てない。

庄司氏の災難

大前氏より堀内氏に電話がある。

「浦河港で先に釣り場に向かった庄司氏を追うと、『助けてー』というような細かい声が聞こえてきた。声のする方をよく見ると海中に人がいる。庄司氏だ。リュックを背負ったままの形で浮いていたのだ。細紐を投げ入れて、それにつかまってもらい、119番通報する。すぐに救急車が来て、助け上げ、浦河日赤病院に搬送した。大前氏も付き添ったが意識はあるので大事にはいたらないだろう。家族にも連絡が付いたので、これから釣り場に

戻る。」

というものだ。

会長にも電話があったので、会長は釣り道具を片付け、助けに行く算段をしていると、嵐氏の奥さんから電話が来た。事務局長が混乱して、嵐氏の家族へも意味不明の電話をしたらしい。

庄司氏は、今後、釣りをどうするのだろうか。家族からの猛反対はあるだろうが、今回のことを戒めとして、慎重に身長を重ねて、参加してほしいものだ。

大会終了後、会長・事務局長で見舞いに行った。